

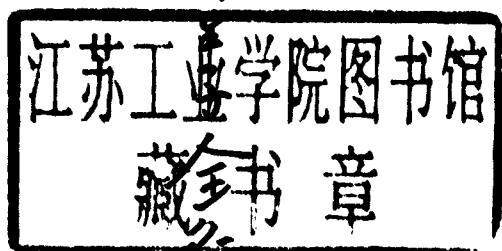
野上浩子全集

第Ⅱ期

第二十三卷

翻訳
6

鄂上學



第Ⅱ期

第Ⅱ期

第二十三卷

岩波書店

野上彌生子全集

第II期 第二十三卷

第十六回配本

(全二十六卷)

一九八八年三月七日 発行

定価三九〇〇円

著者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・六五・一四二二
振替 東京六三三〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

コルネリの幸福	スピリ	一
うさぎのラバット	ローソン	三九
うさぎの丘	ローソン	三七
お能・狂言物語		三六
後記		三七

コルネリの幸福

ヨハンナ・スピリ

和子、光子、謙一、三千子へ――

あなた方のお父さまが三人ともまだ子供の時分には、おばあさまの訳したこんな種類の御本を悦んで読んでくださったものでした。あなた方ももう少し大きくなつて、ものが読めるやうになつたら、この御本を読んでくださるのでせうね。さうしてコルネリは、同じ作者の書いたハイヂと、いはば姉妹であるやうに、あなた方にも、それに劣らない親しいお友だちとなるにちがひないと思ひます。

目次

第一章	川音の高いイレルバハ	七	第六章	新しい友情	一〇二
第二章	てつべんの家	二四	第七章	新しい悲しみ	一〇四
第三章	新しいお客様	三〇	第八章	母親	一〇六
第四章	いやな出来事	三六	第九章	大きな変化	一〇八
第五章	またイレルバハのお客様	四二	第十章	イレルバハの新生活	一一七

第一章 川音の高いイレルバハ

若いぶなの木立は、どうどうと音をたててゐるイレルバハの流にそうて、もう一度青葉になりかけてゐました。騒がしい南風が軽い梢をあちこちとゆすぶるにつれて、輝やかしい緑はなほもきらきらするかと思ふと、急にうす暗く翳^{かげ}つてぼうつとなりました。大きな浮雲が強い風に駆りたてられ、たえず太陽を掠めてゐるのです。この風に逆らつたり、追はれたりしながら、一人の小さい娘がいきいきした赤い頬をして、髪毛を吹きなびかせ、うれしくつてたまらないやうな眼つきで、森を駆けぬけてゐました。あたまに載つてゐる筈のまるい帽子は腕からぶら下り、烈しい風が吹くたびに前後^{まうしろ}にぶらんぶらんして、今にもリボンがちぎれて飛んで行きさうに見えました。ひゆうひゆういつてゐた風もやつといくらか静まり、樹かげはずつとおだやかになりました。小さい娘は走りやめて歌ひでした。

牧場は雪だ。

どこもこども雪だ。

あたまの上も、

足の下も雪だ。――

申し分なしだ。

ほおい、ほおい。

申し分なしだ。

空にはお日さま、

木にはかつこう、

流の縁にはバタカップ。――

さあさ、おいでよ、いやですか。

ほおい、ほおい。

さあさ、おいでよ、いやですか。

うそはさへづり、

つばめは屋根を飛びまはる。

わたしも飛びます、うたひます。

うれしいな、うれしいな。

ほおい、ほおい。

うれしいな、うれしいな。

子供は、森ぢゆうがこだまするほどしつかりした声でうたつたので、鳥の群がはしやぎたち、おたがひに囀りかはしました。子供はからからと笑ひだし、もう一度せい一ぱいにうたひました。

ほうい、ほうい、

さあさ、おいでよ、いやですか。

すると枝といふ枝から、ありとあらゆる鳥の声が競争するやうにひびきわたりました。

森のはづれには、ぶなの老樹が、どんな暑い日でも、そのかげだけは冷や冷やするほどに枝をひろげ、高くがつしりと立つてゐました。娘はその木のところまで来ると、あちこち揺れてゐる枝をしばらく見あげてゐました。そこは一層風あたりが強いので、震へて、唸つてゐる樹頭を見てゐると、なにかぢつとしてゐられないやうな気持になりました。急に子供は吹きつける風にむかつて飛びだし、それに負けまいとして、もがき、争つて走りました。それから不意にくると向きをかへました。今度は風に追はれて、牧場の峻しいふちを駆けくんだり、狭い谷にはひる小径にでました。それから音たかく流れてゐる小川の方へどんどん駈けつづけ、緑いろの斜面からその流れが眺められるやうになつた小さい木造の家まで行きました。狭い段段が外がはから入口の扉のところまでつ

いてゐました。扉の前の、ひろい横木の嵌まつたあけつ放しの廊下には、見事なカーネーションの花が美しい匂ひをまき散らしてゐました。

野ばなしの小さい娘は、この家を知りぬいてゐると見えます。二段づつ、三べん飛んで、のぼりつきました。

「マルタ、マルタ、」彼女はあけつ放しになつた戸口から、家の中へ呼びかけました。

「出ておいでよ、今日はすばらしい風が吹いてるのを知らないの。」

白髪のアたまに、頭巾をきつちりかぶつたおばあさんが出て来ました。ひどく簡単なものを着てゐながらいかにも小ざつぱりしてゐるので、荒れた手を見なかつたら、身なりをくづさないためにいちんち椅子でぢつとしてゐるのか、と、知らない人は考へたかも知れませんでした。

「森でも、丘でも、こんなすばらしい風が吹いてるのを知らないつてことないわ、マルタ。」

おばあさんが出て来ると、彼女はいひました。

「とてもひどい風で、鳥みたいに吹き飛ばされたり、山から谷底まで吹き落されなくなかつたら、いつしようけんめい突つばらなけりやならないわ。そのひどいことつたら、とても地べたには立つてゐられないのよ。こんなおもしろいおもてを知らないつてことないわ。」

「私はまあ御免でございますわ。」マルタは子供の手を握つて歓迎しながらいひました。「風ですこしだらしない恰好になつてゐますね。コルネリ、さあ、ちゃんと直してあげませう。」

子供の濃いまつ黒い髪毛はめちやくちやになり、左側のあたまの髪毛は右側に行き、右側のは左

側にかぶさつてゐました。前掛はずれて、横つちよにかかつてゐました。着物からちぎれた紐は、森の茨の小枝や葉つばを曳きずつて、それと絡^かみついてゐました。マルタはまづあたまをきちんとして、前掛をまつすぐにしてやり、それから針と糸をもちだして、ちぎれた紐を縫ひつけました。

「やめてよ、マルタ、やめてよ。」コルネリは突然大きな声で叫んで、着物をひつたくりました。「指がひどくなつてゐるぢやないの。針あとばかりだわ。すつかり見えてよ。」

「構ひませんよ。おだしなさいまし。」

マルタはなほも縫ひつづけながら答へました。

「こんな小つちやい着物を縫ふのはなんでもありませんわ。私の指の針あととは、お百姓や、鉄工場の職工さんたちに、厚ぼつたいシャツを拵へてやるからそれで出来るのですよ。その時はまるつきり別な縫ひ方をいたすのですからね。どうかすると指がちぎれますわ。」

「そんなこととしてやらなくたつていいわ、マルタ。あんな人たちに自分のシャツは自分でさせて、自分の指に針あとをつけさせりやいいぢやないの。」コルネリは腹をたてていひました。

「いいえ、コルネリ、」おばあさんは言葉を返しました。「私は仕事をして、毎日のパンを心配なしに手にいれられるのをありがたいことだと悦んでゐるのです。なにもかも神様のおかげですし、ことに無事で働けるのはほんたうにありがたいことでございますわ。」

コルネリは、こざつぱりしてゐるだけで家具類も質素な小さい部屋を注意ぶかく見まはしました。「神様はただ眼をかけてゐるだけで、たいしたことはしてくれてやしないわ。お前が自分でやつ

てゐるだけだわ。」子供はさういひました。

「自分でやつて行けるからありがたいのでございますよ。」マルタは答へました。「ね、コルネリ、もししたいことは自分で出来るやうな無事なからだに神様がさせて下さらなければ、したいことがある時に、用事をしてくれるものは誰もありませんもの。毎朝美しいお日様の中にでて行つて、カーネーションを運びだしたり、また明け暮れたのしくくらしで行けるのをありがたいと思へるのも、神様のおかげですよ。憂き苦勞をして、泣きの涙で日をたててゐる人が多いのですからね。さうでせう、コルネリ、全くありがたいことで、指に傷がついたつて仕事はやめずにすみませうし、こんなありがたいことつてございませんわ。さあ、今度はあなたのことです。終業のベルが鳴つてゐるから、旦那様の御食事の時間です。大急ぎで歸つていらつしやなくちやいけませんわ。」

マルタがかうしてその小さい友だちを家に歸すやうにするのは、どうかすると時間のたつのが忘れられ、よく迎ひのものが来るのがあつたからでした。コルネリは小さい坂を駈けをり、どうとうと鳴つてゐる谷川のふちにそつて、そのやかましい音で一部分かき消されながらも、終日火がぱちぱちして、碎く音や、金づちの音が聞こえてゐる大きな建物をさして行きました。これはこの地方でも有名な大きな鉄工場で、附近の者はみんなここで働いてゐました。

コルネリは大戸をちらと眺めたが、それはもう縮まつてゐました。それで大跨^{おはまた}に駈けぬけ、三方を花の多い庭でとりまかれて、谷川を見おろすやうになつた一軒建の家の方へ行きました。それは鉄工場の主人の屋敷でありました。コルネリは家のずっと向側にある空地を突つきり、帽子を隅つ

こに抛りこんで置いて、居間にはひりました。食卓のところでは父親が新聞をひろげてゐて、顔をあげようとしませんでした。コルネリは自分のお皿のスープを手早く食べたが、父親は新聞を読みつづけて身じろぎもしなかつたので、彼女は食卓に出てゐるその他のものを、なにかも一人で食べてしまひました。父親は顔をあげました。コルネリは林檎をかじつてゐました。

「おや、先に食べつちまつたね。私はまだ途中だつたのだよ。」彼はいひました。

「御飯におくれてもいけないが、先にすましたつて、お行儀がわるいことになる。だが、すんだのならこの手紙を郵便局にもつて行つておくれ。お前に関係したこともあるから、うれしいだらう。この話は今晚するよ。今はとにかくすぐ出かけなければいけない。」

コルネリは渡された手紙をとると、お皿に載つた林檎の食べかけをかき集めて飛びだしました。川づたひに、びよんぴよん走りながら、狭い谷の小径からひろい大通りに出ました。ホテルや郵便局はみんなそこにありました。愛嬌のよいおかみさんは、あけつ放しになつた玄関に立ちながら、優しく笑ひかけてたづねました。

「どこへいらつしやるのですか。そんなに急いで。」

「あんたのところよ。」コルネリは息せき答へました。「手紙をださなけりやならないの。」

「ぢや、いただきます。大切に取扱ひますよ。」おかみさんは、さう答へてコルネリがさしだした挨拶の手を握りしめました。「あなたはたいそうお丈夫なのですね、コルネリ。なんの苦勞もお知りなさらない。」